実践事例

（郷土）常磐南小学校　６年

常南の良さを伝え、常南のこころを持ち続ける子

４月～１１月（２１時間）

１　ねらい

常磐南学区は、自然に恵まれた環境にあり、地域の人たちはお互いのつながりを大切にしている。住宅地エコロタウンの誘致に伴い、学区の人口、児童数は増加してきている。６年生は、エコロタウン在住の子供たちが多いが、これまでの地域学習を通して、常南の良さを知り、大切にしたいという思いをもっている。そこで、学区を支えてきた農業や文化、歴史などの多くの視点から学区を見つめ直し、それを伝えていきたいという思いを自然薯栽培の活動を柱として、深めていきたいと考えた。

２　実践の概要

本校では、地域の農家の方を講師に迎え、20年以上自然薯栽培を続けている。地域の産業である自然薯栽培については、低学年の時から農家の畑や上級生が取り組む学校の畑の栽培活動の見学を通して身近に感じていた。今年度の自然薯栽培の取り組みには、最上級生として責任感と誇りをもって取り組むことができた。

（１）自然薯畑作り

「長くて白い自然薯を作りたい」という目標を掲げ、運動場の東側にある自然薯畑で、植え付けの準備をした。昨年度までの自然薯の出来栄えをふまえ、うねの位置や長さを決めた。昨年は東西に延びる４本のうねを作ったが、中央の２本のうねでは、自然薯が大きく育たなかった。農家への聞き取りから、水はけと日光の当たり具合が影響していると推測された。そこで、今年は、水はけが悪い畑の中央は使わず、南と北の端に２本のうねを長く作ることにした。

（２）自然薯植え付け

地域の自然薯農家の方のご指導を受け、自然薯栽培用のパイプに赤土を詰め、畑にうめた。昨年は、粒子が細かい赤土を使った畑では、９月に多く降った雨がたまってしまい、自然薯が腐ってしまった。そこで今年は、水はけをよくするために粒子の荒い赤土を使った。赤土は酸性で、適度な保水力があることが赤土を使う理由であることを教えてもらい、農業には天候などの自然条件が大きく関わるとともに、よい作物を作るための工夫があることを知った。

資料①　自然薯植え付け

また、効率よく畑を使うために、パイプを埋める角度を工夫すること、案内棒を立てること、パイプに水や雑菌が入らないようにビニル袋をかけることなど植え付けのこつを教えていただいた。

（３）自然薯栽培について聞き取り調査

地域の自然薯農家の方に自然薯栽培について聞き取り調査を行った。昨年１１月に収穫の様子を見学し、学校と農家の自然薯栽培には、違いがあることを知った。学校の畑で「長くて白い自然薯」を作るにはどのような世話したらよいかを詳しく知るために質問をした。葉やつるの成長は天候だけでなく、支柱の立て方、害虫駆除や除草にも関わりがあり、葉やつるの成長が自然薯を大きく育てるために大切なことがよく分かった。しかし、地面の中の自然薯の出来栄えは、収穫の時まで分からないことも分かった。

質問１　天候と自然薯の成長
質問２　葉の数やつるの長さと自然薯の大きさの関係
質問３　支柱の立て方
質問４　自然薯の品種
質問５　自然薯につく害虫

資料②　聞き取り調査の質問

（４）自然薯の世話

昨年、学校田の稲作の学習の時に、地域の農家の方にＪＡが発行している「水稲栽培ごよみ」を紹介していただいた。稲作のそれぞれの作業に適した時期、肥料の種類などが書かれている。自然薯にも同じように「自然薯ごよみ」があり、植え付け、水やり、支

柱立て、敷きわらなどの作業が説明されている。こよみと聞き取り調査を参考に自然薯の世話をした。５月初めに猿による被害があったので、猿よけネットをかけた。獣害対策は、常南では欠かせないことであることをあらためて認識することができた。８月には、ヤマイモハムシによる被害があった。北側の山に近いうねに多くの虫がついたので、農家の方に協力していただき、消毒をした。自然薯の成長の様子の記録と共に来年の畑作りのために、獣害、害虫の記録が大切なことに気付くことができた。

資料③　敷きわら、
猿よけネットの設置

（５）自然薯掘り

11月に地域の自然薯農家の方のご指導を受け、５年生と６年生で自然薯掘りをした。４月に深さ 50 ㎝の溝を掘り、パイプを埋めた。その溝を再び掘り返し、パイプを傷つけないように周りの土を丁寧にどかした。自然薯を傷つけないようにそっとパイプごと取り出し、赤土を取り除くと長い自然薯が顔を出した。パイプを１本取り出すごとに自然薯の出来栄えに歓声があがったり、ため息がもれたりした。小さな自然薯も見逃さないように丁寧に７０本程のパイプを掘り出した。今年は、南側のうねの方が長く育った自然薯が多かった。子供たちは、掘り出した自然薯の大きさの違いについて、日光の当たり方や害虫が影響しているのではないかと推測した。

資料④　自然薯の収穫

（６）収穫感謝の会

毎年、学校田のお米と６年生が育てた自然薯でとろろご飯を作り、お世話になった学区の方、授業の講師さんなどをお招きし、収穫感謝の会を開いている。全校を６つの縦割りグループに分け、６年生を中心にとろろご飯を作った。地域の方を調理の講師として迎え、だし汁、とろろの作り方を教えていただいた。６年生は下級生に指示を出して、手際よく調理をすることができた。

収穫感謝の会では、１、２学期の生活、総合的な学習のまとめの発表を全学年が行った。栽培で分かったこと、聞き取りで分かったことに加え、自然薯が地域の特産品であること、栽培を継続してほしいことを発表することができた。

資料⑤　収穫感謝の調理

（７）すてきミーティング

学区評議員さんと意見を交換する「すてきミーティング」では、「常南の未来を考える」というテーマで話し合った。子供たちは、常南の特産品を学区外の人に知ってもらうために、特産品を販売する店や稲作、自然薯栽培の体験ができる場所、自然を生かしたハイキングコースがあるとよいという意見を出すことができた。地域学習で学んだ常南の良さを学区外の人にも知ってもらいたいという気持ちを高めることができた。

資料⑥　収穫感謝の会の６年発表

３　実践を振り返って

新興住宅地に住む児童が全校の７割を占めるようになり、学区を知ることがますます大切になってきた。地域の移り変わりも含め１年生から地域学習を積み重ねた６年生は、常南の変化と良さを学び、自然薯栽培をはじめとする地域の農業、学区の環境を誇りに思っている。そして、学区外の多くの人に常南の良さを知ってもらいたいと考えるようになった。子供たちが学区を愛する「常南のこころ」をこれからも持ち続けてほしい。